

## 遠いところにいる「友だち」を想う

はじめて南タイのフィールドに入ってから30年、そこで多くの時を一緒にすごしたチェーオとは、その後つかず離れず、互いの生を交差させつつ年を重ねている。日常的に会うことのない「友だち」とのかすかな繋がりから、生のはかなさを感じ、それゆえにこそ繋がり大切さを想う。

西井凉子 にしりょうこ / AA 研

### 南タイの村の生活

チェーオは、1987年から1989年にかけて南タイのムスリムと仏教徒が混住する漁村にはじめてフィールドワークに入ったときに知り合った、数少ない同年代の女性の一人だった。仏教徒の彼女は、カニ漁に従事していたが、まだ結婚しておらず親と住み、比較的自由な時間をもてたため、いつも村から町まで行くときには誘って一緒にでかけていた。

調査村は、当時、特にムスリムの酒のみが多く、この地域でも酒の売り上げが一番だという評判をきいていた。村で居候させてもらう家に到着した初日に警察官が早速数人で車でやってきて、酔っぱらいに気をつける、暗くなったら一人では出歩かないようにと警告していった。私は、50ccの中古バイクを手に入れ、移動手段にしていたが、

村から16キロメートルのところにある町までの道は、人気のないマングローブ林と、ゴム園の間を通り抜けなければならない、道連れは必ず必要だった。その道は赤土で、乾いているときは、髪の毛や顔がオレンジ色になるほどの土煙がまあいがり、また雨が降るとぬかるんで滑り、町まで行くのはちょっとした遠出であった。しかし町では、村では普段食べることのできない焼きそばを食べたり、甘いミルクのたっぷり入ったアイスティーを飲んだり、買い物をしたりと、月に1度ほどのこの遠出を二人とも楽しみにしていた。

### チェーオの結婚と子供

長期のフィールドワークを終えて1989年に帰国した翌年、再び村を訪れたときにちょうどチェーオの結婚式に参加することができた。私は花嫁の友人としてつきそい、また当時村ではカメラをもっている人がほとんどいなかったため、カメラマンとして、鶏をつぶして料理するところから、式を終えるまでの過程を写真におさめていった。

次に村を訪れたときには、チェーオはベンという息子を出産したばかりだった。タイの村では、子供はおむつをしない。下半身は丸出しで、高床式の家の床は竹で編んであるので、大小便を家の中でしたとしても水をかけて床下に流してしまえばいいのである。チェーオの家の床にあぐらをかいて座り、ベンをだっこしたとんだった。いきなり勢よくピューとおしっこが発射され、身につけていたタイ風の巻きスカートがびしょぬれとなって、私はあわてて飛び上がった。それをみて一同大笑いとなったが、その後ベンが大きくなっても、当人を前にしてチェーオとはその話で笑い転げる。

### チェーオの父の死

チェーオの父親のナーチュイはエビ漁を専業と

マングローブ林の中をカニ漁にむかうチェーオ(2004年)。



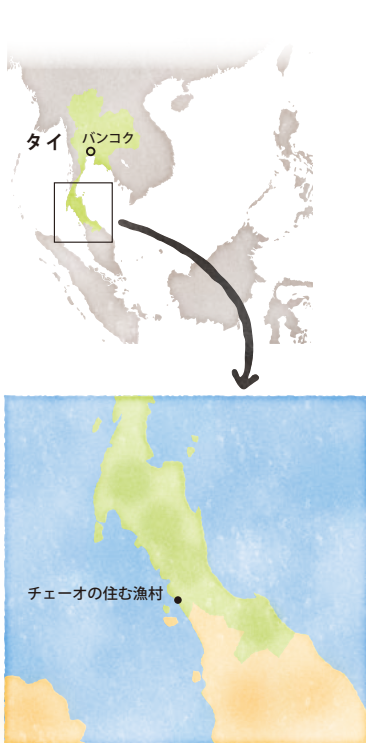
カニの好漁場のマングローブ林(2004年)。

していたが、趣味人で、本業以外に小舟で村の沖合の海に浮かぶ奇岩に登って燕の巣をとったり、鳥を仕掛け網でとったり、ハチミツを森の中に探しにいたり、他の村人があまりやらない色々の「遊び仕事」に、私をしばしば連れていってくれた。

子供の頃はチェーオはそんな父親にくっついてまわり、姉と弟二人の4人兄弟の中でも、大の父親っ子だった。ナーチュイを悲劇が襲ったのは、2002年のことである。ナーチュイは、マングローブ林の中で、ナーチュイと妻との姦通を疑った村の外から婚入してきたばかりのある男性に、斧で頭を切りつけられて殺されてしまったのである。ナーチュイを殺した犯人は、村の中に潜んでいるところをすぐに捕まった。チェーオは「助けることはできなかった。避けることはできなかった。この人が殺さなくても、時が至れば死ななくてはならない」と諦念を示す言葉を口にした。

ナーチュイが殺されたのは、カニの好漁場だった。チェーオは、しばらくはそこに罟を仕掛けに行けなかった。チェーオだけではない。二ヶ月たっても誰もそこにはカニの罟を仕掛けに行かなかったという。チェーオは、他の人は全然とれないときもなぜか彼女の仕掛けた罟にはカニがかかるというカニ漁の名人である。チェーオは、父親の死後果敢に漁場に戻ろうとした。

彼女は次のように言った。「お父さんの火葬がすんで、一、二回の潮は罟を仕掛けに行けなかつ







バケツの中の、チェーオが獲ったカニ(2004年)。



翌日に結婚式を控えたベンと新妻になる女性。手に自らが作った模型の家をもつ(2018年)。

家の前でくつろぐチェーオ(入口右)と母親(入口すぐ左)たち(2018年)。



ダンボール紙と木切れで作った見事なタイ式家屋の模型。左の皿の中は結婚式用にチェーオたちが作ったカオニョウ・ケオ(もち米とココナッツミルクと砂糖を長時間かけて火にかけて、一口サイズの塊に分けてカラフルな紙で包んだ結婚式用の定番の菓子)(2018年)。

\*写真はすべて筆者撮影。

た。あっちはカニがたくさんいるけれど、一回目はそこまで行かなかった。ひざが震えて、心臓がどきどきした。行き着くことができた、二回目は。……そろそろと行ってお父さんが死んだ場所を見た。何か見えるか。(でも)何も見えなかった。側にいた親族女性が「何か(超自然的なもの)が見えはしない。(もし見えたとしたら)それは自分の心のせいだ」と言った。

この会話からしばらくして、彼女はこのマングローブ林の漁場にもどってカニの罠を仕掛け始めた。父の死から一年が経過した2003年には、これまで見るのがつらいからと戸棚にしまっていた写真が、部屋に飾られていた。「この頃は、心をコントロールすることができるようになった」とチェーオは言った。彼女は運命に抗するというよりも、受け流しつつそれでも前に進もうとしていた。

### 息子ベンへと繋がる想い

その後、チェーオは夫婦共に中部タイのエピの養殖会社が村に新たに作った養殖池の管理をする仕事を見つけ、少し生活も安定して一人息子のベンを専門学校に進学させることができた。

2018年8月、村を訪問すると、ベンが結婚するという。私が村を出発する翌日が結婚式だ。持ち合わせていた日本からのささやかなプレゼントを渡すと、ベンはダンボール紙と木切れで作った見事なタイ式家屋の模型をくれた。ナーチュイに

似たのか、小さい頃から手先が器用なベンが何ヶ月もかかって作ったものだという。壊さないように苦労して日本に持ち帰ったが、この見事な工芸品を前に、チェーオからベンへと繋がる想いを受け取った気がした。

30年前にチェーオと多くの時間を共有し、その後断続的ではあるが、チェーオの人生の変遷に触れつつ現在に至る。ある意味で、つかず離れず、チェーオと私は互いの生を交差させつつ年を重ねている。互いに独身でまだ家族をもっていなかった頃から、結婚し、子供ができてと、それぞれの状況も変化してきた。やがては別れがくることも必然だろう。

チェーオとは、日本にいて日常的に連絡をとることはない。しかし、たとえ短期の滞在でも村に行くとき必ずチェーオとは会い、互いの状況を伝え合う。お菓子作りが得意なチェーオは、いつも私が食べたいものを尋ねて作ってもってきてくれる。

チェーオからベンへ、親から子へと、その想いが繋がっていくことは奇蹟的なことだと感じる。このことを奇蹟的だと感じるようになったのは、じつはもう一人の友人アニックとのことがあったからだ。

### もう一人の「友だち」から、繋がる想いについて考える

アニックは私と同じ年のフランス人で、互いに17歳の高校生の頃から文通しており、一度私が

結婚して間もなくフランスに旅行したときに、夫婦で休暇をとって一緒に城めぐりにつれていってくれた。いつかお礼に日本を案内したいと思いつつも、それ以来会うこともなく、やがて交流が間遠にはなっていたが、毎年誕生日カードとクリスマスカードの交換は欠かさず行っていた。アニックの筆跡はとても美しく、郵便受けに手紙が入っていると表書きですぐにわかった。ある年に癌になって治療中だという乱れた字の短い手紙がきた。そして今から2年前、フランスから受け取ったのは、アニックとよく似た、しかし少し異なる筆跡の手紙だった。それは、アニックの息子からのアニックの死を知らせる手紙だった。そこにはアニックの死の様子が記され、アニックから日本の友だちのことをよく聞かされていたとあった。いつかアニックたちを日本へ招待したいと思っていたことはかなわなかったけれど、それは息子の代で実現するかもしれない。

人と人の関係は永遠に同じではありえない。人と人を繋ぐ想いが、親から子へと伝わることは、人の生が移り変わり、別れがあることに思い至らせ、生のはかなさや哀しさを感じさせる。それゆえにこそ、そうした繋がりは愛おしく貴重なものとなるのではないだろうか。チェーオもアニックも、遠いところにおいて日常的に会うことは難しいけれど、いつもどこかで私の生と交差しており、私にとっては大切な「友だち」である。

FP